

# 韓国人日本語学習者のあいづちとうなずきに関する研究

—日本語母語話者との比較を通して—

土 田 明 穂

本研究の目的は、韓国語を母語とする上級日本語学習者を対象に、あいづちとうなずきの特徴を日本語母語話者と比較して示すことである。韓国人日本語学習者5名と日本語母語話者5名を対象に、初対面自由会話(2015年3月に実施、1会話30分、計10会話)を設定して調査を行った。会話の前後を除いた10分間を対象として分析した結果、以下のことが明らかになった。あいづちでは、韓国人日本語学習者は感声的表現の「はい」系を多用する傾向があり、日本語母語話者は概念的表現の「そう」系を多用する傾向にある。また、うなずきでは、韓国人日本語学習者は「小さいうなずき」を多用する傾向にあり、日本語母語話者は「大きいうなずき」を多用する傾向にある。さらに、あいづちとうなずきにおいて、韓国人日本語学習者はあいづちを伴わないうなずきを多用する傾向にあり、日本語母語話者はあいづちを伴ううなずきを多用する傾向にある。今回の調査では、初対面という場面設定が結果に影響している可能性があり、今後の継続的検証が必要である。

【キーワード】 あいづち、うなずき、韓国人日本語学習者

## 1. 研究背景

韓国人日本語学習者と日本語で会話する際、聞き手である韓国人日本語学習者が話し手の話を本当に聞いているのか、疑問に思われることがある。日本語での会話において、聞き手の反応は、話し手との会話を円滑に行う上で重要である。しかしながら、聞き手としての韓国人日本語学習者には違和感があり、その違和感にはあいづちが関係しているのではないかと考えた。堀口(1988)は「聞き手の言語行動」としてあいづちを取り上げており、「聞く」ことは受動的な行為ではないことを指摘している。また、堀口(1988:14)は「このような聞き手からの反応や働きかけや助けは、笑いやうなずきなどによって非言語的に表れることもあれば、言語的に表れることもある」としている。さらに、メイナード(2013:46)は「あいづちは脇役というより、日本語のインターアクションには不可欠な表現である。情報とともに重要な、態度、感情、人間性、待遇表現、キャラ立ち、ユーモアなどに関連して、豊かな表現性を発揮する。」と指摘し、①「うん」「ふーん」「へえ」「なるほど」などの比較的短い表現、②頭の動き(はっきりとした縦振りと横振り)、③笑い、笑いに似た表現という3点を挙げている。以上の指摘から、聞き手の反応には、言語的なものと非言語的なものの2種類があり、それぞれを用いることによって話し手に対する印象に影響を及ぼすことが考えられる。そこで、本研究では、言語的なものとしてのあいづちと、非言

語的なものとしてのうなずきに着目して調査を行う。

## 2. あいづちとうなずきに関する先行研究と本研究の目的および研究課題

まず、あいづちに焦点を当てた研究で、姜(2001)は、日本語だけでなく、韓国語と比較し、あいづちの研究を行っている。調査の結果から、韓国語より日本語の方があいづちの頻度が高かったことが明らかになっている。また、日本人は、韓国人よりあいづちを頻繁に打つだけでなく、相手の発話に対し同意、共感、感情の共有を積極的に示すことによって、話し手の発話に積極的に協力し、話し手と共同で発話を作り上げるという傾向にある特徴も明らかにしている。宮永(2013)の母語や学習歴が異なる日本語学習者を対象とした研究では、母語話者と学習者で出現するあいづちの種類は異なり、学習者の中でも学習歴の上位群と下位群でも異なることを明らかにしている。

さらに、大浜・西村(2005)では、「あいづちは、形式を問わず聞き手である人が発するすべての発話である」と定義し、①話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る表現(非言語行動を含む)、②あいづちに対するあいづちと言えるもの、③少し間をおいてとられたターンの開始時に現れる表現、④質問に応じる形で現れた「はい、ええ、うん」など、という4点もあいづちとみなしている。大浜(2006)では、具体的なあいづちの分類方法を提示しており、感声的表現と概念的表現に分類している。感声的表現とは、指す概念を持たずにそれ自体で直接に話し手の感情を表す表現であり、概念的表現とは、もともと概念を表す言語形式であるが、感動詞的にも使われる表現である。さらに下位分類を行い、感声的表現には、「あ」系、「うん」系、「え」系、「お」系、「はい」系、「ふーん」系、「へー」系、「ほー」系、「まあ」系があり、概念的表現には、「すごい」系、「本当」系、「いや」系、「いい」系、繰り返し系、「そう」系、文末系があるとしている。

次に、うなずきに焦点を当てた研究では、小熊他(2004)の日本人を対象とし、タスクを用いてうなずきを分類した研究や、宮崎(2009)の日本人を対象としてポライトネス・ストラテジーに注目した研究がある。小熊他(2004)では、うなずきを「了解・確認の表示」、「会話の切り上げ・別れの表示」、「感謝・依頼の表示」の3種類に分類している。その結果、うなずきは了解、確認を表す言語表現とともに用いられ機能する場合が最も多いことを指摘している。一方、宮崎(2009)では、初対面で目上の話し手から指示を受ける場合と、親しい同世代の話し手から指示を受ける場合を調査し、聞き手のうなずきは言語のあいづちの代替としてだけでなく、間接的に敬意表現を行うポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとしての機能を併せ持つと指摘している。

さらに、陳・小熊(2000)は、あいづちとうなずきを併せてあいづち行動とし、4名での会話を対象としてあいづちとうなずきの関係を探っている。参加者が対面している日本語の会話では、あいづち行動はうなずきを伴っていることが非常に多いことが明らかになっており、フォローアップ・インタビューから、あいづち行動の頻度の高さは、話題の進行を促す気持ちの表れである傾向にあることも指摘している。

以上の先行研究の結果を踏まえ、考えられる課題点を述べる。研究の目的によっては対象者の母語が統一されない場合もあり、対象者の母語によって、違いが現れることも考えられる。また、あいづちとうなずきとの関係をみている先行研究が少ないことが指摘され

る。先行研究にも挙げたように、日本語の会話ではあいづちとうなずきを伴っていることが多いことから、あいづちとうなずきとの関係を見る必要性があると考えられる。

上記の先行研究では、研究によってさまざまな定義が見られるが、本研究では、大浜・西村(2005)と大浜(2006)を参考に「あいづちは、形式を問わず聞き手である人が発するすべての発話である」ものとする。

次に、うなずきに関する定義を述べる。本研究では、メイナード(1993:61)の「うなずきは、はっきりと正常位置から下を向きすぐに元の位置に戻すのみで、下を向いてから上を向くまでの間に時間が経過するものは含まない」ものとする。

以上の定義を踏まえ、韓国語を母語とする学習者に焦点を当て、あいづちとうなずきの双方から韓国人日本語学習者と日本語母語話者との関係を見ることを研究目的とした。そして、研究課題を以下の3つに設定した。

- (1)日本語母語話者と韓国人日本語学習者では、あいづちの出現頻度と出現の割合に違いがあるか。違いがあるとすれば、それはなぜか。
- (2)日本語母語話者と韓国人日本語学習者では、うなずきの種類と出現頻度および出現の割合に違いがあるか。違いがあるとすれば、それはなぜか。
- (3)日本語母語話者と韓国人日本語学習者では、あいづちとうなずきの関係に違いがあるか。

### 3. 研究方法

まず、本研究における調査対象者は、韓国人日本語学習者と日本語母語話者のそれぞれ5名ずつ、計10名とした。韓国人日本語学習者と日本語母語話者ともに20代前半であり、韓国人日本語学習者は日本語能力試験N1取得者に限定した。調査は、韓国人日本語学習者は韓国で、日本語母語話者は日本で実施した。本調査で話し手となる協力者の日本語母語話者は2名であり、韓国での調査で1名、日本での調査で1名である。協力者は2名ともに対象者よりも年上であるが、協力者2名の年齢に大きな差はない。また、対象者と協力者は、調査時が初対面である。以上より、韓国人日本語学習者が5会話、日本語母語話者が5会話の計10会話を収集した。

次に、調査手続きについては、対象者と協力者に対し「30分間自由に会話してください」とだけ伝えた。また、韓国人日本語学習者の対象者のみ意識調査に協力してもらった。なお、意識調査の質問および回答はすべて韓国語で行った。調査の様子は、ICレコーダーでの録音およびビデオでの録画を行った。

#### 3.1 分析方法

分析対象となるデータは、調査で得られた30分の会話のうち、前後を除いた10分間である。また、本研究においては、韓国人日本語学習者をK、日本語母語話者をJとした。あいづちの分類は、大浜(2006)の分類方法に従った。うなずきの分析については、メイナード(1993)に従い、うなずきの認定作業を行った。次に、陳・小熊(2000)に従い、うなずきの大小の区分を行った。うなずきは、大きいうなずき、小さいうなずきともに一度の首の縦振りを一回とし、連続しているものについてはまとめて数えないこととする。なお、

判断基準については、大きいうなずきを首の縦振りが深いものとし、小さいうなずきを首の縦振りが浅いものとした。

#### 4. 結果と考察

本章では、調査で得られたデータを文字化し、研究課題別に韓国人日本語学習者と日本語母語話者それぞれの結果を示す。

##### 4.1 研究課題(1)の結果と考察

研究課題(1)「日本語母語話者と韓国人日本語学習者では、あいづちの出現頻度と出現の割合に違いがあるか。違いがあるとすれば、それはなぜか。」について、結果と考察を述べる。まず、あいづち表現の実数と割合を、KとJで比較する。以下に表1を示す。

表1 韓国人日本語学習者と日本語母語話者に現れたあいづち表現の頻度と割合

	K	J
感声的表現	195(88.2%)	90(45.5%)
概念的表現	26(11.8%)	108(54.5%)
合計	221(100%)	198(100%)

表1で示したように、Kは感声的表現が88.2%、概念的表現が11.8%と感声的表現の割合が高いのに対し、Jは感声的表現が45.5%、概念的表現が54.5%と概念的表現の割合が高いことが明らかになった。そこで、Kに多く現れた感声的表現のあいづちの系およびJに多く現れた概念的表現のあいづちの系を比較する。以下に、それぞれの実数および割合を見るための表2、表3を示す。

表2 感声的表現のあいづちの系の種類と割合

	K	J
「あ」系	26(13.3%)	14(15.6%)
「うん」系	23(11.8%)	40(44.4%)
「え」系	3(1.5%)	0(0.0%)
「お」系	0(0.0%)	0(0.0%)
「はい」系	143(73.4%)	32(35.6%)
「ふーん」系	0(0.0%)	0(0.0%)
「へー」系	0(0.0%)	4(4.4%)
「ほー」系	0(0.0%)	0(0.0%)
「まあ」系	0(0.0%)	0(0.0%)
計	195(100%)	90(100%)

表3 概念的表現のあいづちの系の種類と割合

	K	J
「すごい」系	0(0.0%)	0(0.0%)
「本当」系	0(0.0%)	1(0.9%)
「いや」系	0(0.0%)	0(0.0%)
「いい」系	0(0.0%)	0(0.0%)
繰り返し系	5(19.2%)	1(0.9%)
「そう」系	21(80.8%)	106(98.2%)
文末系	0(0.0%)	0(0.0%)
計	26(100%)	108(100%)

表2および表3で示したように、Kに最も多く現れた感声的表現のあいづちの系は「はい」系で73.3%であった。また、Jの場合、最も多く現れた概念的表現のあいづちの系は「そう」系で98.1%であった。そこで、本研究では、なぜKに感声的表現である「はい」系が多く現れたかということについて、対象者の母語である韓国語の「はい」と日本語に

おける「はい」を比較し、考察する。

先行研究の中で、심(2013)が、韓国語における「はい」は肯定形の表現として使われることを指摘している。韓国語における「はい」には、예(ye)と네(ne)の2種類があり、예(ye)には、尋ねられたことに対し積極的に答える言葉や、理解できなかったとき聞き返す言葉、さらにターン交替時の冒頭に発せられる言葉という3つの意味を持っている。一方、네(ne)は、フォーマルな場面で答えたり反問したりする言葉という意味を持っていることが述べられている。したがって、Kにとって「はい」というあいづちは、主に丁寧さを基準として使い分けていることが考えられる。では、日本語における「はい」の機能はどのようになっているのだろうか。富樫(2002)は、あいづち表現の「はい」は、聞き手にとって情報が充足した箇所では「はい」が使われることを指摘している。심(2013)、富樫(2002)の指摘から、韓国語における「はい」は話し手との関係性によって使われるのに対し、日本語における「はい」は話の内容によって使われるといった違いがあることが指摘できる。本調査では、初対面かつ聞き手の方が年下という場面で行われたため、より丁寧さが現れる「はい」系を過剰使用したことが可能性の一つとして考えられる。今後、KとJを対象とした意識調査を行い、検証する必要がある。

#### 4.2 研究課題(2)の結果と考察

研究課題(2)「日本語母語話者と韓国人日本語学習者では、聞き手の非言語行動であるうなずきの種類と出現頻度および出現の割合に違いがあるか。違いがあるとすれば、それはなぜか。」について、結果と考察を述べる。まず、KとJのうなずきの種類と頻度および割合を比較し、以下の表4、図1に示す。

表4 KとJに現れたうなずきの種類と頻度および割合

	K	J
大きいうなずき	388(43.3%)	412(91.8%)
小さいうなずき	509(56.7%)	37(8.2%)
計	897(100%)	449(100%)

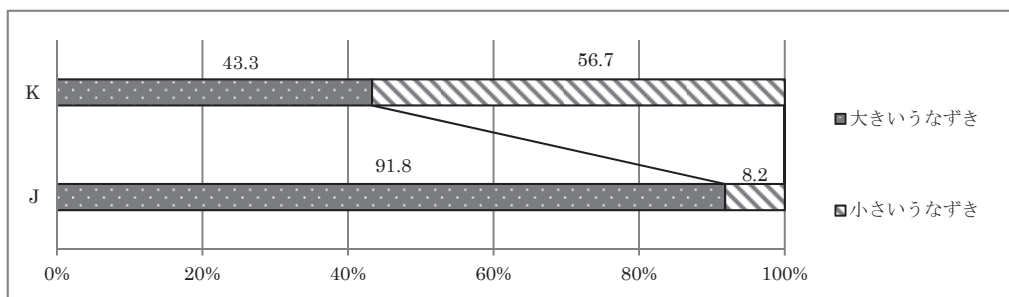


図1 KとJに現れたうなずきの種類と割合の比較

表4および図1で示したように、KとJに現れたうなずきの実数は、Kの方が多かった。また、種類と割合を見るとKは大きいうなずきが43.3%、小さいうなずきが56.7%と小さいうなずきの割合が高かったのに対し、Jは大きいうなずきが91.8%、小さいうなずきが8.2%と、大きいうなずきの割合が高いことが明らかになった。つまり、Kは小さいうなずきを使用する傾向にあり、Jは大きいうなずきを使用する傾向にあるということである。以下では、なぜKは小さいうなずきを使用する傾向にあるのか、考察する。

崔(2008)では、日韓のあいづちにおける形式的な観点からの差異について、司会者2名(男女)とゲスト1名のインタビュー番組を対象に日韓比較を行っている。崔(2008)は、韓国語では相手が当人にとって意味深く真摯な話をする時にはあいづちを打たず、その代わりに相手の話を遮ることのないうなずきを多用する傾向があることを指摘している。崔(2008)の研究ではインタビュー番組が調査対象となっており、司会者とゲストが初対面であった可能性が高く、初対面という状況がうなずきを多用させる要因の一つであることが示唆される。今回調査したKの日本語会話においても、崔(2008)が指摘する韓国語会話において見られる傾向が現れた可能性があるが、今後、本調査と同じ条件を適用した上で、対象者の母語である韓国語会話で検証する必要がある。

#### 4.3 研究課題(3)の結果と考察

研究課題(3)「日本語母語話者と韓国人日本語学習者では、あいづちとうなずきの関係に違いがあるか。」について、結果と考察を述べる。まず、KとJのあいづちとうなずきとの関係を比較した頻度および割合を表5および図2に示す。

表5 KとJに現れたあいづちとうなずきとの関係を示した頻度と割合

	K	J
あいづちと共起する	290(32.3%)	269(59.9%)
あいづちと共起しない	607(67.7%)	180(40.1%)
計	897(100%)	449(100%)

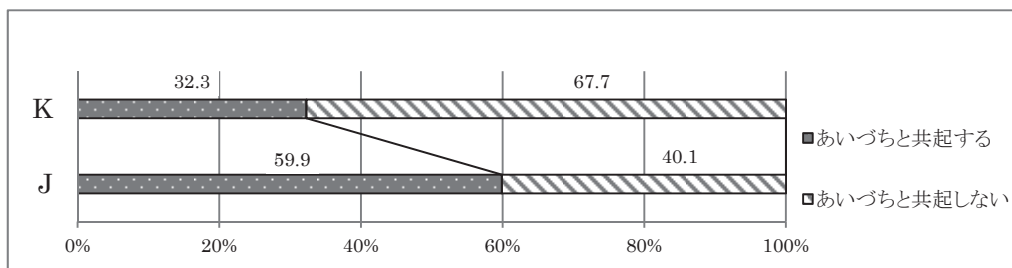


図2 KとJに現れたあいづちとうなずきとの関係を示した割合の比較

あいづちを打つ際にうなずきを伴うかという観点から結果を見る。うなずきの総数が韓国人日本語学習者と日本語母語話者で異なるため、考慮して結果の比較を行う。表5および図2に示されているように、Kは、あいづちと共起するうなずきが32.3%、あいづちと



共起しないうなずきが 67.7%であり、あいづちと共起しないうなずきの方が多かった。これに対し、J は、あいづちと共起するうなずきが 59.9%、あいづちと共起しないうなずきが 40.1%であり、あいづちと共起するうなずきの方が多かった。この結果から、K はあいづちを伴わないうなずきが多い一方で、J はあいづちを伴ううなずきが多いことが明らかになった。本調査ではうなずきを主軸にあいづちとうなずきの関係を見たため、今後は、あいづちを主軸に置いたあいづちとうなずきとの関係を見る必要がある。

## 5. 結論

本研究では、あいづちとうなずきの 2 つの観点から K の特徴および J との比較、考察を行った。前章で示した研究課題(1)、(2)、(3)の結果と考察から、本研究における K のあいづちとうなずきの特徴を、J と比較しながら以下に述べる。

(1)あいづちにおいて、K は感声的表現の「はい」系を多用する傾向があり、J は概念的表現の「そう」系を多用する傾向にある。それぞれの母語の観点から考察すると、韓国語における「はい」は話し手との関係性によって使われるのに対し、日本語における「はい」は聞き手が話し手の話を理解した程度によって使われるといった違いがあることが指摘できる。本調査では、初対面かつ聞き手の方が年下という場面で行われたため、より丁寧さが現れる「はい」系を過剰使用した可能性が考えられる。今後、韓国語母語話者と日本語母語話者を対象とした意識調査を行い、検証する必要がある。

(2)うなずきにおいて、K は「小さいうなずき」を多用する傾向にあり、J は「大きいうなずき」を多用する傾向にある。崔(2008)は、韓国語では相手が当人にとって意味深く真摯な話をする時にはあいづちを打たず、その代わりに相手の話を遮ることのないうなずきを多用する傾向があることを指摘している。今回調査した K の日本語会話においては、崔(2008)が指摘する韓国語会話の特質が現れた可能性がある。今後、本調査と同じ条件を適用し、対象者の母語である韓国語会話で検証する必要がある。

(3)あいづちとうなずきにおいて、K はあいづちを伴わないうなずきを多用する傾向にあり、J はあいづちを伴ううなずきを多用する傾向にある。本調査ではうなずきを主軸にあいづちとうなずきの関係を見たため、今後は、あいづちを主軸に置いたあいづちとうなずきとの関係を見る必要がある。

## 6. 今後の課題

本研究は、あいづちとうなずきを中心に調査を行い、結果と傾向を示した。しかしながら、本研究では、調査対象者が K、J とともに 5 名ずつであったため、今後はさらに人数を増やし、より確実な結果を示す必要がある。本調査の内容に関連し、K の母語である韓国語で会話を行った場合、どのような結果が現れるのかということについては関心が高い点である。対象者と協力者との関係性を統一するため、K、J とともに初対面および対象者が年下という場面に限定して調査を行った。このような場面が本研究の結果に影響していることも考えられるため、今後検証する必要がある。

さらに、本研究では非言語行動の中でも「うなずき」に焦点を当てたが、韓国人日本語学習者に行った意識調査では「目を合わせる」という非言語行動も聞き手行動として捉え

ていた。そこで、今後は視線にも注目した調査を行うことも検討したい。

## 参考文献

- (1) 大浜るい子(2000)「日本語のターン交替とあいづち—母語話者と学習者の比較をとおして」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』49 広島大学大学院教育学研究科 pp.153-161
- (2) 大浜るい子・西村史子(2005)「日英のターン交替と相づち使用の実相—日本人学生とニュージーランド学生の比較を通して—」『社会言語科学』第7巻第2号 社会言語科学学会 pp.78-87
- (3) 大浜るい子(2006)『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』溪水社
- (4) 小熊貞子・馬場眞知子・広田妙子・越前谷明子(2004)「会話の終結部に見られる非言語行動」『多摩留学生センター教育研究論集』4 東京学芸大学 pp.33-38
- (5) 姜昌妊(2001)「日韓男女のあいづちの対照研究」『武庫川女子大学言語文化研究所年報』第13号 武庫川女子大学言語文化研究所 pp.45-60
- (6) 崔維卿(2008)「日韓談話スタイルにおける「あいづち」の基礎的研究」『比較社会文化研究』第24号 九州大学 pp. 23-44
- (7) 陳姿菁(2001)「日本語の談話におけるあいづちの種類とその仕組み」『日本語教育』108号 日本語教育学会 pp. 24-33
- (8) 陳姿菁・小熊利江(2000)「話題に対する聞き手の心的態度が『発話のあいづち』と『うなずき』の出現に及ぼす影響」『人間文化論叢』第3巻 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 pp. 237-248
- (9) 富樫純一(2002)「「はい」と「うん」の関係をめぐって」定延利之編『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房
- (10) 堀口純子(1988)「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64号 日本語教育学会 pp.13-26
- (11) 宮崎幸江(2009)「ボライトネス・ストラテジーとしての聞き手のうなずき」『上智短期大学紀要』29 上智短期大学 pp.55-72
- (12) 宮永愛子(2013)「日本語学習者の相づち表現の分析—接触場面の雑談データをもとに—」『金沢大学留学生センター紀要』16 金沢大学留学生センター pp.31-43
- (13) メイナード・K・泉子(1993)『会話分析』くろしお出版
- (14) メイナード・K・泉子(2013)「あいづちの表現性」『日本語学』第32巻第5号 明治書院 pp. 36-48
- (15) 심혜보(2013)「한국어 맞장구 표현 교육 연구—교재 반응을 위한 기능별 분석 중심으로—」경희대학교 대학원 국어국문학과 석사학위논문(未公刊修士論文)  
(「韓国語のあいづち表現の教育研究—教材に反映するための機能別の分析を中心に—」慶熙大学大学院 国語国文学科 修士学位論文)